

# 槍が岳に登った記

芥川龍之介

青空文庫



## 赤沢

雑木の暗い林を出ると案内者がここが赤沢あかざわですと言った。暑さと疲れとで目のくらみかかった自分は今まで下ばかり見て歩いてきた。じめじめした苔こけの間に鷺草さぎぐさのような小さな紫の花がさいていたのは知っている。熊笹くまざさの折りかさなつた中に兔うさぎの糞ふんの白くころがつていたのは知っている。けれどももいつたい林の中を通つてるんだか、やぶの中をくぐっているんだかはさっぱり見当がつかなかった。ただむやみに、岩だらけの路を登つて来たのを知っているばかりである。それが「ここが赤沢です」と言う声を聞くと同時にやれやれ助かったという気になった。そうして首を上げて、今まで自分たちの通つていたのがしげつた雑木の林だったということを意識した。安心すると急に四方のながめが眼にはいるようになる。目の前には高い山がそびえている。高い山といつても平凡な、高い山ではない。山やま膚はだは白つちやけた灰色である。その灰色に縦横の皺しわがあつて、くぼんだ所は鼠ね色ずみいろの影をひいている。つき出た所ははげしい真夏の日の光で雪がのこっているのかと思われるほど白く輝いて見える。山の八分がこのあらい灰色の岩であとは黒ずんだ緑でま

だらにつつまれている。その緑が縦にMの字の形をしてとぎれとぎれに山膚を縫ったのが、なんとなく荒涼とした思いを起させる。こんな山が屏風びょうぶをめぐらしたようにつづいた上には浅黄あさぎじゆす繻子のように光った青空がある。青空には熱と光との暗影をもった、溶けそうな白い雲が銅をみがいたように輝いて、紫がかつた鉛色の陰を、山のすぐれて高い頂にはわせている。山に囲まれた細長い溪谷は石で一面に埋められているといつてもいい。大きなのやら小さなのやら、みかげ石のまばゆいばかりに日に反射したのやら、赤みを帯びたインク壺つぼのような形のやら、直八面体の角ばつたのやら、ゆがんだ球のようなまるいのやら、立体の数をつくしたような石が、雑然と狭い溪谷の急な斜面に充たみされている。石の洪水こうず。少しおかしいが全く石の洪水という語がゆるされるのならまさしくそれだ。上の方を見上げると一草の緑も、一花の紅もつけない石の連続がずうっと先の先の方までつづいている。いちばん遠い石は蟹かにの甲羅こうらくらいな大きさに見える。それが近くなるに従ってだんだんに大きくなって、自分たちの足もとへ来ては、一間に高さが五尺ほどの鼠色の四角な石になつている。荒廢と寂じやくまく寞——どうしても元始的な、人をひざまずかせなければやまないような強い力がこの両側の山と、その間にはさまれた谷との上に動いているよ  
うな気がする。案内者が「赤沢の小屋つてなアあれですあ」と言う。自分たちの立っ

る所より少し低い所にくくりまくらのような石がある。それがまたきわめて大きい。動物園の象の足と鼻を切つて、胴だけを三つ四つつみ重ねたらあのくらいになるかもしれない。その石がぬつと半ば起きかかった下に焚火たきびをした跡がある。黒い燃えさしや、白い石がうずたかくつもつていた。あの石の下に寝るんだそうだ。夜中に何かのぐあいであの石が寝がえりを打つたら、下の人間はびしょんこになってしまふだろうと思う。溪谷の下の方はこの大石にさえぎられて何も見えぬ。目の前にひろげられたのはただ、長いしかも乱雑な石の排列、頭の上におおいかかるような灰色の山々、そうしてこれらを強く照らす真夏の白い日光ばかりである。

自然というものをむきつけにまのあたりに見るような気がして自分はいよいよはげしい疲れを感じざるを得なかった。

### 朝三時

さあ行こうと中原が言う。行こうと返事をして手袋をはめているうちに中原はもう歩きだした。そうして二度目に行くよと言ったときには中原の足は自分の頭より高い所にあつ

た。上を見るとうす暗い中に夏服の後ろ姿がよろけるように右左へゆれながら上って行く。自分もつえを持つてあとについて上りはじめた。上りはじめて少し驚いた。路といつてはもとよりなんにもない。魚河岸うおがしへ鮪まぐろがついたように雑然とところがつた石の上を、ひよいひよいとびとびに上るのである。どうかするとぐらぐらとゆれるやつがある。おやと思つてその次のやつへ足をかけるとまたぐらりとくる。しかたがないから四つんばいになって猿のような形をして上る。その上にまだ暗いのでなんでも判然とわからない。ただまつ黒なものの中をうす白いものがふらふらと上つてゆくあとを、いいかげんに見当をつけてはつて行くばかりである。心細いことおびただしい。おまけにきわめて寒い。昨夜ぬいでおいたたびが今朝けさはごそごそにこわばっている。手で石の角をつかむたんびに冷たさが毛糸の手袋をとおしてしみてくる。鼻のあたまがつめたくなつて息がきれる。はっはっ言うたびに口から白い霧が出る。途中でふり向いて見ると谷底まで黒いものがつづいてその中途で白いまるいものと細長いものが動いていた。「おおい」と呼ぶと下でも「おおい」と答える。小さい時に掘井戸の上から中をのぞきこんでおおいと言うとおおいと反響をしたのが思い出される。まるいのは市村の麦わら帽子、細長いのは中塚の浴衣ゆかたであった。黒いものは谷の底からなお上へのぼつて馬の背のように空をかぎる。その中で頭の上の遠くに、

菱<sup>ひし</sup>の花びらの半ばをとがったほうを上にしておいたような、貝塚から出る黒曜石<sup>やじり</sup>の鏃<sup>やじり</sup>のよ  
 うな形をしたのが槍<sup>やり</sup>が岳<sup>たけ</sup>で、その左と右に齒<sup>しだ</sup>朶<sup>だ</sup>の葉のような高低をもつて長くつづいたの  
 が、信濃<sup>しなの</sup>と飛騨<sup>ひだ</sup>とを限る連山である。空はその上にうすい暗みを帯びた藍<sup>あいいろ</sup>色にすんで、  
 星が大きく明らかに白<sup>びやく</sup>毫<sup>こう</sup>のように輝いている。槍<sup>やり</sup>が岳<sup>たけ</sup>とちようど反対の側には月がま  
 だ残っていた。七日ばかりの月で黄色い光がさびしかった。あたりはしんとしている。死  
 のしずけさという思いが起ってくる。石をふみ落とすところからという音がしばらくきこえ  
 て、やがてまたもとの静けさに返ってしまう。路<sup>みち</sup>が偃<sup>はい</sup>松<sup>まつ</sup>の中へはいると、歩くたびに湿  
 つぽい鈍い重い音ががさがりとする。ふいにギヤアという声があった。おやと思うと案  
 内者が「雷鳥です」と言った。形は見えない。ただやみの中から鋭い声をきいただけであ  
 る。人をのろうのかもしれない。静かな、恐れをあらんだ絶<sup>ぜつ</sup>嶺<sup>れい</sup>の大気を貫いて思わずも  
 きいた雷鳥の声は、なんとなくあるシンボルでもあるような気がした。

(明治四十四年ごろ)





# 青空文庫情報

底本：「羅生門・鼻・芋粥」角川文庫、角川書店

1950（昭和25）年10月20日初版発行

1985（昭和60）年11月10日改版38版発行

入力：j.utyama

校正：かとうかおり

1999年1月11日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 槍が岳に登った記

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>